

個別共同研究 3

中国・韓国の旧日本租界

—— 研究班の3年間 ——

私たちの研究班が2008年～10年度に取り組んだことを簡単に紹介する。

08年度は、貴志俊彦研究員の発案により「非文字史料としてのポスターの保存と活用」と題する公開研究会を10月25日にみなとみらいKUポर्टスクエアで開いた。姫路市立美術館田島奈都子氏、高島屋史料館廣田元氏、函館市中央図書館奥野進氏と貴志研究員がそれぞれ「総論：ポスター研究の現状と課題」、「企業史料館としての立場から：所蔵ポスターの保存・修復・公開」、「公共図書館としての立場から：所蔵ポスターのデジタル・アーカイブ化の試み」、「教育研究機関としての立場から：満洲（国）ポスターの学術利用の事例」のタイトルで報告し、報告後フロアとの間で活発な質疑が行われた。各種のポスターを取り上げた研究は最近盛んなようであり、租界の研究にとっても応用できる内容であり、さらには、非文字資料研究にとって大いに関心を持つべきテーマだと実感しながら参加した。詳しくは、『非文字資料研究』No.21を参照のこと。

年度が押し迫った09年3月28日には、上海・東華大学陳祖恩教授の支援を得て、上海文廟（孔子廟）会議室で「租界研究の新しい可能性を探る上海シンポジウム」を開いた。セッション1では、孫安石研究員が「The North China Herald と日中関係史」、金光載氏（韓国・国史編纂委員会）が「上海の租界と韓国人（1910-1945）」、貴志俊彦研究員が「『中国における“外国人”人口統計データベース』を利用した地域人口分析——中華民国及び満洲国を事例として」と題する報告をし、陳祖恩氏がコメントを担当した。セッション2では、羅蘇文氏（上海社会科学院歴史研究所）が「時代のシンボル、文明の記憶」、韓東洙氏（韓国・漢陽大学）が「仁川における日本および清国の租界」、富井正憲氏（研究協力者、韓国・漢陽大学）が「中国と韓国の旧鐘紡社宅地に関する調査報告」、李百浩氏（武漢理工大学）が「武漢における日本租界地の保存と再生」と題する報告をし、徐蘇斌氏（天津大学）がコメントした。会議には華東師範大学、上海師範大学、復旦大学の研究者や院生、上海在住の日本人の参加があり、熱のこもった報告と討論を行い、歴史学と建築学による共同研究の推進、日中韓における東アジア比較研究という視点の提示、旧租界地とその建物を歴史遺産として保護することの意義等が強調された。詳しくは、『非文字資料研究』No.22を参照のこと。

09年度は、10月24日に漢陽大学韓東洙、富井正憲両教授の援助の下、仁川広域市仁川ハーバー・パークホテルを会場にして、「東アジア地区租界生活空間に関する仁川シンポジウム」を開いた。報告は、貴志俊彦研究員の「『戦前期、東アジア絵はがきデータベース』と、満洲国プロパガンダ・ポスター」、孫安石研究員の「朝鮮における清国租界関係の史資料について」、陳祖恩氏（上海・東華大学）の「明治時代、上海日本人居留民の“文明開化”運動」、李義煥氏（韓国・仁荷大学）の「条規・条約体制と仁川の清・日専管租界」、呂煥鎮氏（韓国・延世大学修士課程）の「国際保養地となった元山租界の現況」、青木信夫氏（天津大学）の「開発と保存のダイナミクス——中国北方経済センター・天津における文化遺産の現在」で、李百浩氏（武漢理工大学）、富井正憲研究協力者、金龍

河氏（仁川発展研究所）、李榮昊氏（仁荷大学）、白池雲氏（仁荷大学）がコメントした。この会議では、朝鮮における清国および日本租界が取り上げられるとともに、上海の会議から引き続き、都市の復元と保存の問題が主要なテーマとして議論され、資料の共有や研究者のネットワークの形成を目指すことが確認された。詳しくは、『非文字資料研究』No.23を参照のこと。

年度末の10年3月には、この数年内に各所で発表した論文9篇を集めて『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』（神奈川大学人文学叢書27、御茶の水書房）と題する本を出版した。この中には上記の上海シンポジウムと仁川シンポジウムでの報告をもとにした論文もあるし、COE時期に発表した論文もあり、神奈川大学を中心とする租界研究としては、2006年に出版した『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』に続く2冊目の論文集で、大里、貴志、孫3研究員が編集を担当した。

10年度は、2年間研究員としてシンポジウムに出版にと活躍した貴志俊彦氏が他大学に移籍したのに伴い、研究協力者になってもらった。また、ここ数年シンポジウムの運営に協力を惜しまなかった漢陽大学の韓東洙氏が、3月から12月まで非文字資料研究センターの客員研究員として席を置き、研究協力者になってもらうとともに、持参した朝鮮における清国租界に関する資料を大里、孫両研究員と数回読み合わせたのは、貴重な研究交流の機会となった。研究班内の研究会としては、9月3日に谷川竜一氏（東京大学生産技術研究所）を招いて、「日露戦争前後の朝鮮半島における灯台建設と日本」と題する報告をしてもらった。そして11月26日に、「中国・朝鮮における租界研究のいま」と題するシンポジウムを神奈川大学横浜キャンパスで開催した。報告は、大里浩秋研究員の「租界研究の現状と展望」、孫安石研究員の「日本人が見た上海——『上海案内』の世界」、袁継成氏（中国・中南財經政法大学）の「漢口租界研究について」、李愛麗氏（中国・中山大学）の「広州の租界研究と海関」、高錫珪氏（韓国・木浦大学）の「朝鮮近代史と木浦の租界」、韓東洙氏（韓国・漢陽大学）の「朝鮮の清国租界——釜山を中心に」、富井正憲氏（研究協力者、韓国・漢陽大学）の「東アジアにおける紡績工場——鐘紡社宅を中心に」、内田青蔵研究員の「横浜居留地の歴史と建築」で、コメントは、川島真（東京大学）、貴志俊彦（京都大学）、吉澤誠一郎（東京大学）の3氏にお願いした。このシンポジウムは、中国、韓国の研究者との共同作業として上海、仁川で開いたシンポジウムの延長に位置するもので、研究班としては3年間のまとめの意味を込めたものであった。報告では、これまで研究班では取り上げることが少なかった中国の漢口、広州、朝鮮の木浦、釜山等の歴史や現況が紹介され、さらに、横浜居留地に関する報告もあったことは、今後の研究の広がりにとって有意義であった。しかし、歴史と建築の視点を結びつけた研究が進展しているのは確認できるとして、それだけで租界研究が事足りることはないとのコメントをもらい、これからの研究において克服すべきこととして肝に銘じた。谷川竜一氏の報告と今回のシンポジウムについての詳細は、『非文字資料研究』No.25を参照のこと。

最後に、租界に関する上記2冊の本から7篇の論文を選び、さらに上海の研究者の論文を加えて、租界に関心を持つ中国人に広く読んでもらうべく、中国語に翻訳して中国で出版することを思いつき、陳祖恩氏の協力を得て、上海有数の出版社である上海人民出版社に依頼することができ、まもなく刊行される運びとなっていることを報告する。

（大里浩秋）